⑤ これからの川とのつきあい

イトウ（アイヌ語：チライ）。かつて、産卵のためいっせいに川をのぼって来る春、アイヌの人々は川でイトウ漁をしたという。（飼育：幕別町ふるさと館：※2）

昔の自然のすがたにもどすことは、かなりむずかしいことです。

例えば、川の流れを昔のようにしてしまえば、多くの住宅地や農地は、川の中やすぐ水につかる場所、また湿地の中になってしまいます。

そこまでいかなくても、自然な形にもどすということは、どこか今の暮らしをガマンすることにつながります。

しかし、人間も生き物である以上、自然とどこかでつながっていた方がいいのではないでしょうか。釣りをそれほど好きではない人でも、近くの川に１m以上のイトウがいるのだとしたらワクワクしませんか？　そして、いなくなってしまったら、少し悲しくありませんか？

愛国大橋（札内川・帯広市）の下にすてられたゴミと、それをかたづける人たち。今の世の中には、川を大事に思う人も、川をゴミすて場にする人もいる。「クリーンウォーク2006 in 札内川」で。

川は暮らしの「ものさし」

自然からのめぐみを取りもどすことで、よりよい未来があるかも知れません。

海から川にもどってくるサケは今、多くが人工ふ化によって放流されています（→p236）。その上に、自然の中でふ化して育つサケも増えた方が、これからのサケや漁業にとっていいことかも知れない、と考える人もいます。

また、川がよごれるということは、わたしたちの暮らしが川に無理をかけているということです。川のよごれ方を見ると、暮らしの中にある問題点が見えてくるかも知れません。

川は、わたしたちの暮らしの「ものさし」となります。

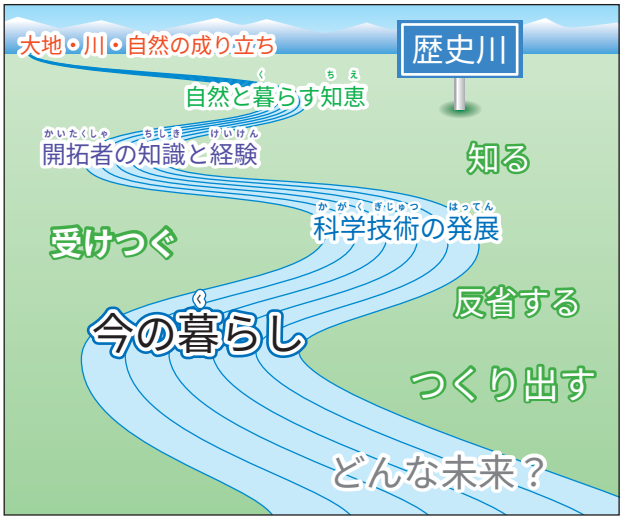
「昔」に学び、水・命・大地の「めぐり」を「未来」の暮らしに生かす

十勝の川は、約１千６百万年前の日高山脈誕生から（→p28）、長い年月をかけて今のすがたになってきました。

川は、水がただ流れるだけの場所ではなく、水がめぐり、地形がつくられ、また、命がつながり、育つところでもあります。２万４千年以上前から十勝には人が暮らし（→p72）、川の水や自然の「めぐり」とともに生き、さまざまな文化をつくり出してきました。

今のわたしたちは、川や自然に手を加えることで、豊かな暮らしを手に入れました。一方で、川の「めぐり」とはなれることで、自然からのめぐみを失い、自然とのつきあい方を忘れてきたようです。

昔にもどることはできませんが、昔の生き方や川と大地の成り立ちから学び、未来に生かすことはきっとできます。



上流から下流へ流れる川のように、「過去」があって「今」があり、そして「未来」につながっていく。

※2　幕別町ふるさと館（まくべつちょうふるさとかん）：幕別町依田 384-3（依田公園横）
電話 0155 - 56 - 3117　月・火曜日休館